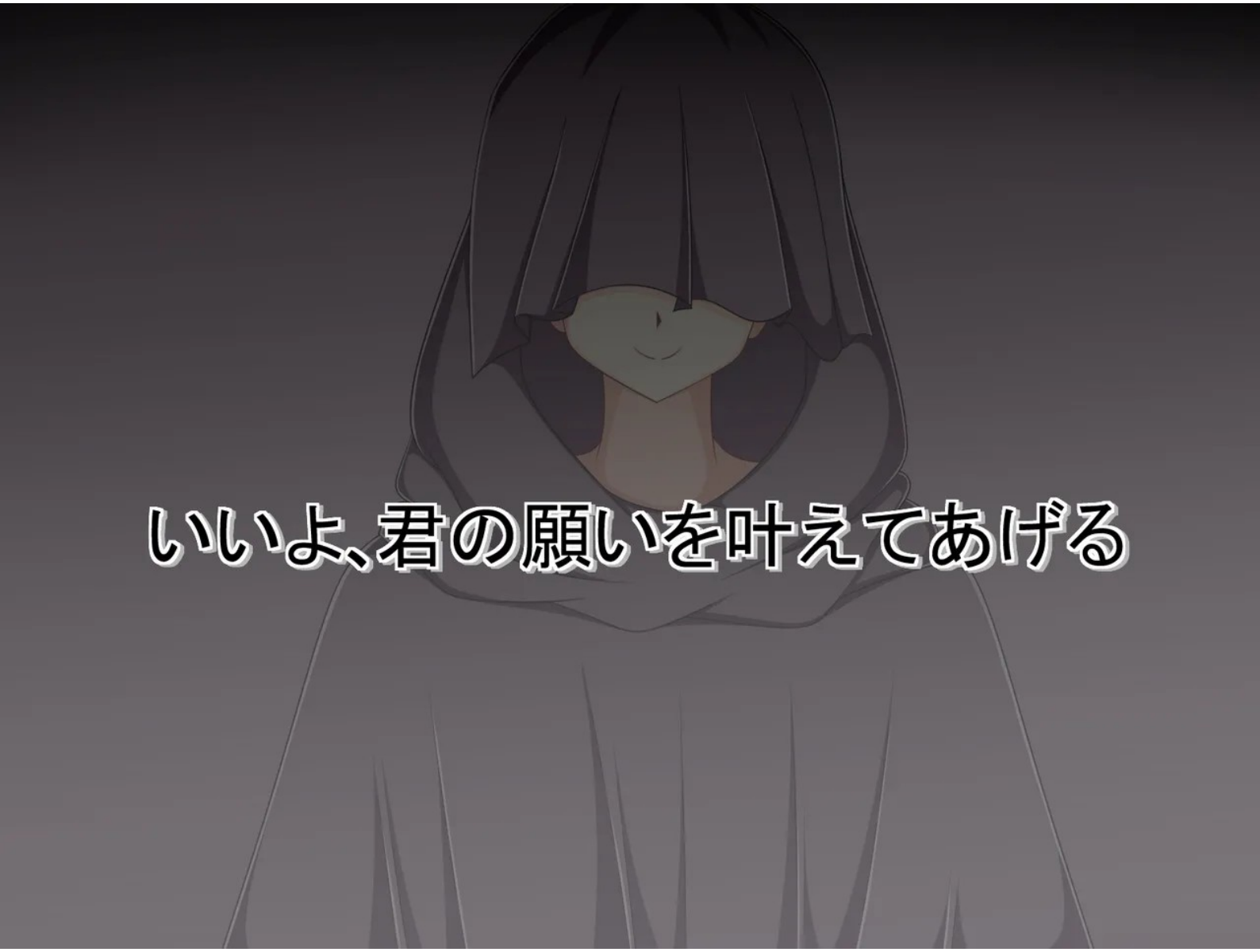

TSもの
～好きになっちゃったんだから仕方ないだろ！～


いいよ、君の願いを叶えてあげる


頭の中で誰かの声が響く。
何を言われたか理解しようとする前に体が
動かなくなり内側から作り変えられていく。
動く事は出来ないが痛みを感じるわけでもない。
ただ着々と作り変えられていく。


どれくらい時間が経ったかは分からないがもう
体の変化は止まっていた。
体の自由は相変わらず効かないが、もうじき
目覚めるのだろう。
何かに押し上げるように意識が浮上していき
目蓋がゆっくりと上がる。


（……何だここ、俺の部屋だよな？）
体を起こし部屋の中を見回す。
部屋自体はいつもの自分の部屋だと分かるが、
周りに飾られているのはとても買ったことの
ないような女の子らしいものだ。
とりあえず着替えようと服に手をかけたところ
で今の自分に起きている異常事態をようやく
認識できた。


ドタドタドタ！
「父さん母さん大変なんだ！」
1階のリビングに降りるなり乱暴にドアを開け放つ。両親は何事かと驚いたような目で俺を見てくる。


「どうしたんだ？そんな格好で慌てて。はしたないから服を着なさい」
父さんは少し驚いたあと、こちらを注意してくる。
普通に考えたらいきなり見知らぬ相手が下着姿で家の中に入り込み自分たちのことを親呼ばわりしているのだ。それなのにこの反応はおかしい。
だが、この時の俺はそんなこと考えてる余裕もなかった。正直今の状況じゃ冷静になんてなれない。
……体が女になってしまっているのだから。


「何って見て分からないのかよ！お、俺、女になっちまってんだよ！」
「女になったって……お前は生まれた時から女だろうが」
父さんは呆れたような目で俺を見る。


「……は？何言って…」
「そうよねぇ、変な夢でも見たの？」
「夢って…」
（どういう事だ？二人共、嘘や冗談を言っている顔にはみれないし、いったい何がどうなってるんだ）


「……それで、僕に連絡してきたと」
「こんな突拍子もない話まともに聞いてくれそうなのはお前しかいないからな」
俺の目の前で腕を組みながら唸っているのは子供の頃からもいつも一緒だった親友の考だ。
藁にもすがる気持ちで話しては見たが、親友のこいつにも信じてもらえなかったら俺は何を信じればいいのかも分からなくなってしまう


「起きたら女になっていって周りもその事に何の疑問も思わない、さらに部屋のものまで変わっているか……」
「やっぱり信じられないか？」
「…いや、信じる信じないの前に僕の認識では優ちゃんは普通に男だったはずなんだけど」
「……は？」


「いきなり女になったって連絡が来た時は何かの悪戯かと思ったけど、話してる時の癖や仕草は優ちゃんのものだしね…」
「それにおじさん達も優ちゃんのことを元から女だって認識してるみたいだし、とりあえず信じるしかないか」


「…う、うおおぉぉ！よかったぁ！いきなり意味の分からない事になってて俺の方がおかしいんじゃないかって不安だったんだ！」
「ちょっ！嬉しいのは分かるけどそんな強く抱きつかないで…くるしい」


「はは、悪りい、悪りい！嬉しすぎてついな！」
「いいよ別に。優ちゃんの突拍子もない行動にはなれてるし。それよりも何か原因になりそうなことに心当たりないの？」


「原因か…そういえばこうなる前にちょっと変な夢を見たぞ。なんかローブを被った奴が俺の願いをかなえてくれるって」
『……女の子になりたかったの？』
「んなわけあるか！俺は男のままの方がいいっつうの！」


「ふーむ、でもそれだけ分からないんだったらやっぱりしばらくは様子見しかないね」
「様子見って…俺、女の生活なんてわかんねぇぞ」
「大丈夫だよ。とりあえず慣れるまで僕がフォローするし、それにいつもどうり学校が終わったら僕の家で遊んでいけばおじさん達にも変に思われないさ」
「そ、そうだな。それなら今までどうりだし大丈夫そうだな」


あれから二ヶ月もたった。
体は相変わらず女のままだが学校なのでは考がフォローしてくれるおかげでなんとかやっていけてる。今も男だった時と同じように考の部屋で寛がせてもらっている。


「……はぁ、日常生活は何とかやっていけてるけど
結局元に戻る方法は見つからないままか」
「しょうがないよ。こんな不思議なこと普通の人
にどうこう出来るものじゃないし」
「そうなんだけどさ…」


(あ～あ、好みな見た目なのに自分相手じゃどうしよもねぇしな)
(……ん？)
何かい言いたそうな目でこちらをチラチラと見て来る考の視線に気づく。
何だ？と視線だけを向けると考は言いづらそうにしながらも口を開く。


「あ、いや、…その、パンツ見えてる…」
「あぁ。…でも俺のパンツなんて見ても楽しい奴なんていないだろ？」
「そ、そんなことないと思うよ」


「何だ、見たいなら見せてやるぞ。お前にはいつも世話になってるからな」
恥ずかしそうに目を背ける考が面白くてついからかいたくなりわざと見えるように足を広げる。


「優ちゃん、その、今は女の子なんだしそういう事はしない方がいいと思うよ。その、僕も優ちゃんが変な目で見られるの嫌だし」
「あ、……うん。分かった」


考の言葉になんだか急に恥ずかしくなり慌てて
足を閉じ普通に座る。
(あれ?何だこれ。さっきまで恥ずかしくも何とも
なかったのに…。んなこと言われたら意識しちま
うじゃねぇかよ…っ)


「ん……っ♥はぁ…あ、あぁ♥」
（パンツの上からいじってるだけなのにすごい濡れて来ちまった）
はぁ はぁ♡
にゅち
にゅち


（…くそっ！俺は何してんだ。こんなこと今まで一度もなかったのにあいつの顔思い出すだけで気持ちよくて指がとまらねぇ♥）
（あいつが俺のことを女の子扱いなんかするからっ♥）
んん♡
はぁはぁ♡
にゅち
にゅち


「んんっ♥あ、あぁっ♥あぁぁ…っ♥」
くちゅくちゅと下腹部からなる淫猥な音に興奮してきたのか、甘い吐息が口から漏れ出してしまう。
自分の口から出た淫靡な女の声に驚くも手を止めることは出来なかった。
あっ♡
はぁはぁ♡
にゅち
にゅち


「ん…っ♥はぁ、はぁ…あ…っ♥ちょっといじってるだけでこんなに気持ちよく…っ♥」
クリトリスの辺りを擦るたびに今までに感じたことのないような快感の波が押し寄せる。
はぁ はぁ♡
にゅち
にゅち


（体がビクビクって震えてっ♥女の発情した声が出ちまう…っ♥）
（俺、男のことを考えながらオナニーして感じちまってるっ♥ダメだ気持ちよすぎてもうイクっ♥）
（女の体でイっちゃうっ♥）
あっ♡
はぁはぁ♡
にゅちにゅち

「♥♥♥っ…っ♥っ」
あっ♡
はぁはぁ♡
にゅちにゅち


（はぁ♥はぁ♥考もこと考えながらイっちまった…。
どうしよう毎日会ってるのに顔合わせづらくなっちまう）
はぁはぁ♡


俺と考は幼い頃から、ずっと一緒にいた親友で
歳をとってもずっとこの関係が続くと思っていた。
けれど今の俺は女で、今までのようにはいかない
なんて嫌でも分かる。
（俺は考の事どう思っているんだろう…）
はぁ はぁ♡


女になってからもう半年も経ってしまった。
けれども相変わらず俺の体は戻っていない。
もう元に戻ることはないかもしれない。
そんな考えが自分の中で大きくなるにつれて
ある思いが浮かび上がってくるようになった。
…そして今日俺は一つの決断をしようとしていた。


「なぁ、お前俺の事どう思ってる？」
「どうって大切な友達…親友だって思ってるけど」
「いや、そうじゃなくて女としての俺をどう思ってるかってこと」
考は質問の唐突さに食べていた菓子を落とすぐらい驚き慌てふためく。


「お、女としてって、なんでいきなり」
「…俺が女になってから結構経つけどさ。未だに体は戻らないし周りも変わったままじゃんか」
「なんかさもうずっと、このままなんじゃないかって思えてくるんだよ」


「なら俺も女として生きる覚悟を決めなくちゃダメかなって？そう考えたらさ、やっぱりお前には隣にいて欲しいんだ」
「で、でも、その…なんで俺なの？」
「そ、そんなの好きになっちゃったんだから仕方ないだろ！それともやっぱりダメなのか？元男の俺なんて…」


「…そんなことないよ！優ちゃんはその、可愛いし正直いつもこうやって一緒にいてずっとドキドキしてた」
「だから、その…僕も優ちゃんと一緒にいたいよ」
「あ…♥」


「ちゅ…っ、ちゅぶ♥れろ♥」
部屋の中でピチャピチャと唾液が絡まる音が響く。
俺は親友と抱き合いながらキスをしている。
ちゅ
ちゅぱっ
はーっ♥
はーっ♥
ぎゅっ♥


「はぁはぁ♥ちゅ…んっ…んむ♥」
ついばむようなキスから徐々に深いものに変わる。
お互いの舌を絡め合う恋人のようなキス。
男とキスをしているのに初めてのそれは深く、甘い。
まるで脳が蕩けてしまいそうなキスだ。
ちゅ
ちゅぱっ
はーっ♥
はーっ♥


捩じ込まれるように口の中に舌が侵入してくる。
「んっ……ちゅぶ……んっ♥…ちゅ♥れろっ♥」
（…どうしよう考とキスしてるって意識したら
よけいドキドキしてきた♥）
ぺちゃ
ちゅぷ
はーっ♥
はーっ♥
ぎゅっ♥


お互いの舌を求め、絡ませ合うたびに脳が痺れ、
秘所からはトロトロとした愛液が溢れる。
（すごっ♥舌が生き物みたいに口の中で絡み付いて
来て気持ちいい♥頭の中溶けちゃいそうだ♥）
ぺちゃ
ちゅぷ
はーっ♥
はーっ♥
ぎゅっ♥


「ぢゅ、…ぢゅる♥…ぢゅぶ♥」
「…じゅぶ…ちゅぶ♥ちゅっ♥れろ♥」
（…あ♥チンコ押し付けられてる♥俺とのベロチューで興奮してるんだ♥こんにデカくして、そんなに俺の中に入れたいのかな？♥）
ちゅ
ちゅぱっ
はーっ♥
はーっ♥


手の中でビクビクと震えるそれをゆっくりとした動きで擦る。
「…う」
「どどどうした？何かまずかったか？」
「あ、いや、手で擦られるのが気持ちよくて…」
俺の問いに考は顔を赤く染めながら答える。


「そ、そうか」
自分の行為で考が感じてくれていると思うと嬉しさがこみ上げてくる。俺は最初より少し慣れた手つきでチンコを扱き始める。
はーはーっ♥


「あは♥すごいな♥チンコもうガチガチだな♥
はは、俺の手でこうされるの好きなんだな…？」
「…あっ♥」
亀頭を指先でやさしくいじり刺激する。
考の可愛らしい声に少し楽しくなってしまう。
はーっ♥
はーっ♥


はーんっ♥
はーんっ♥
キュ
キュ♥
(それにしてもチンコってこんなに硬かったっけ？
血管もビクビク脈打ってすげぇ興奮してる♥)
擦るたびにトロトロとした我慢汁が溢れクチャ
クチャといやらしい音を立てる。


「お前の我慢汁で手がヌルヌルになっちゃったな。
もう出そうなのか？チンコすっごく熱くて手、
火傷しちゃいそうだぞ」
もうそろそろ限界なのだと察し俺は射精に向けて
少しずつチンコを扱く勢いを増していく。
はーはーっ♥
はーはーっ♥

「いいぞ、我慢しないで。イキたくなったらいつでもイっていいんだからな」
「…っ！」
びゅるるる！
はーい♥
はーい♥


勢いよく出たドロドロの精液が顔に掛かる。
「ん…♥出しすぎだぞ。そんなに俺の手が良かったのか？」
「うん。すごい気持ちよかった。今度は俺が優ちゃんにしてあげるよ」
「…へ？」
はーいっ♥
はーいっ♥


「優ちゃんのオマンコもうこんなに濡れてるよ」
「っ♥…うぁ♥」
トロトロと愛液が溢れる秘所を考の指が触れる。
クチュクチュと淫靡な音を立てさせる指使いに
声が漏れてしまう。


（うぁ♥指でクチュクチュされちゃってる俺♥）
「ん、あっ♥んんぅ…っ♥」
いやらしく這い回る指が敏感な場所を刺激する。
自分の意志とは別に体が勝手に反応してしまう。



（俺の体こんな興奮してる）

男の指で感じてしまう己の体にもう自分が女なのだと否応もなく自覚させられる。

「優ちゃんの中温かくてヌルヌルしてる。ここに僕のを入れるんだ」

考の硬く勃起したモノが目に映る。



（…っ♥あれが考の…。すげぇデカくてビクビク脈打ってるっ♥あんなの入れられたら俺どうなっちまうんだ）

想像するだけで胸の高鳴りが止まらなくなる。考の愛撫で火照った体はこれからするであろう行為の期待と不安に熱く疼いてしまっていた。


「入れるよ優ちゃん」
「…う、うん」
ドキ
ドキ❤
はぁ はぁ♡
（…あ❤入れられちゃう❤考とセックスしちゃうんだ❤）


「…っ！…っ！」
僅かな痛みはあったものの先程までの愛撫で蕩けきった膣穴は予想よりも簡単に考のモノを受け入れる。
あっ♡
はぁはぁ♡
ズブブ…


「だ、大丈夫!?」
「ん、ちょっと痛かったけど思ったよりも大丈夫だから動いていいぞ」
はぁはぁ♡



考は様子を見ながらゆっくりと動き出す。
こちらに負担がないように気遣ってくれてるのだろう。その優しい腰使いが堪らなく嬉しくなる。



「っ♥んっ、んんっ♥あぁ……っ♥」

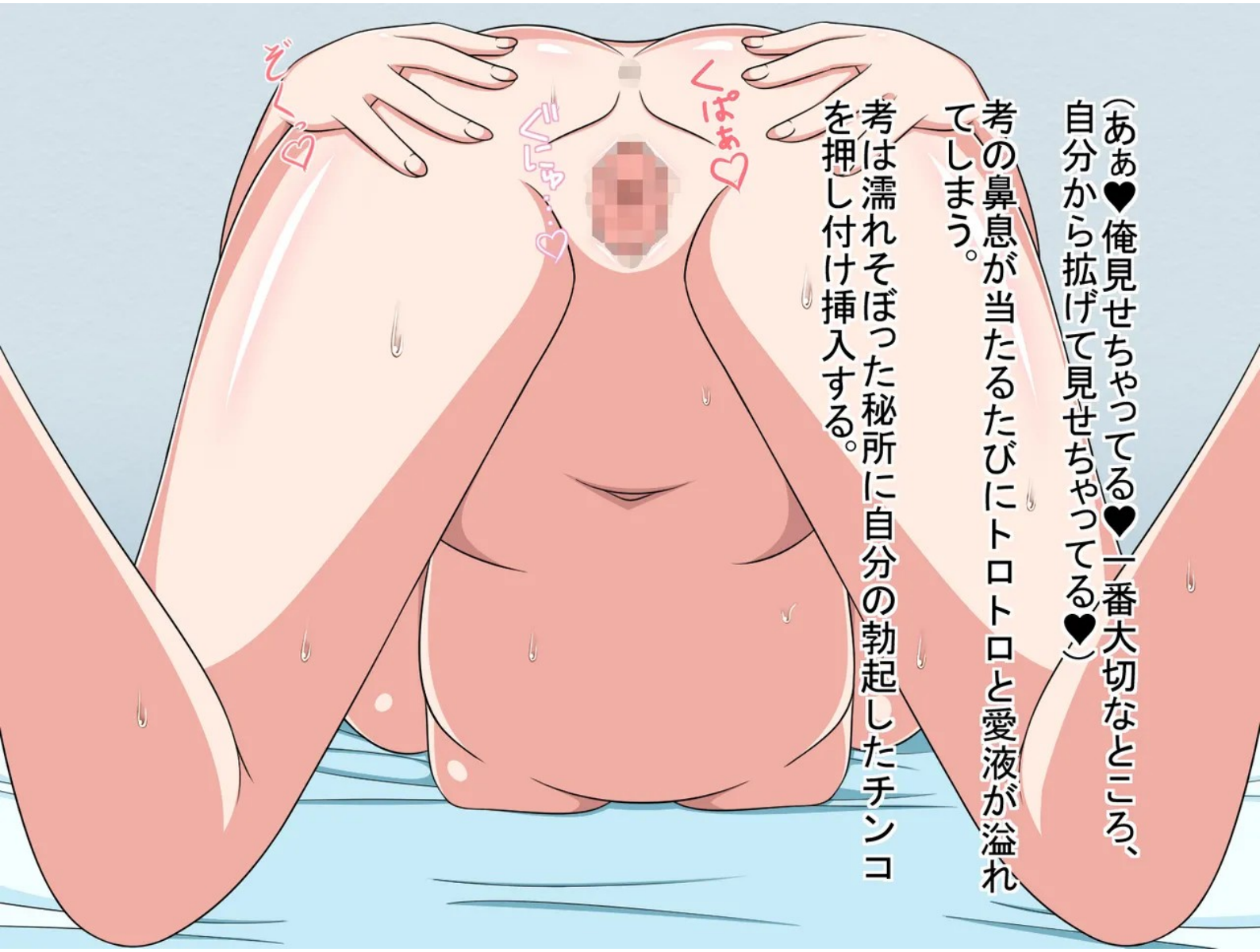
太くて硬いチンコが中で擦れるたびに膣内は考の形に拡げられていく。

幼い頃からずっと一緒だった親友が自分とセックスをしている。今までだったらありえなかった光景にゾクゾクとしたものが背筋に走る。


（あっ、俺の中で大きくなってきた……♥）
徐々に動きが激しくなるにつれジュブジュブといやらしい音が立つ。出し入れされるそれは最初よりもずっと硬くてビクビクと脈打っている。
はぁはぁ♡
パーン
パーン
パーン
ぬっぷ♥
ぬっぷ♥
パーン
パーン
パーン


「っ！優ちゃんもう、俺っ！」
「い、いいぞこのまま中にっ♥」
びゅるるる！
ああっ♡
はぁはぁ♡
びゅるるっ♡
びゅー♡


「ご、ごめん！中に…」
「いいんだよ。出していいって言ったのは俺の方だしな。それに薬も飲むから妊娠はしねーよ」
「…だから、な。もっとしよーぜ♥」
はぁはぁ♡



（あぁ♥俺見せちゃってる♥一番大切なところ、自分から拡げて見せちゃってる♥）

考の鼻息が当たるたびにトロトロと愛液が溢れてしまう。

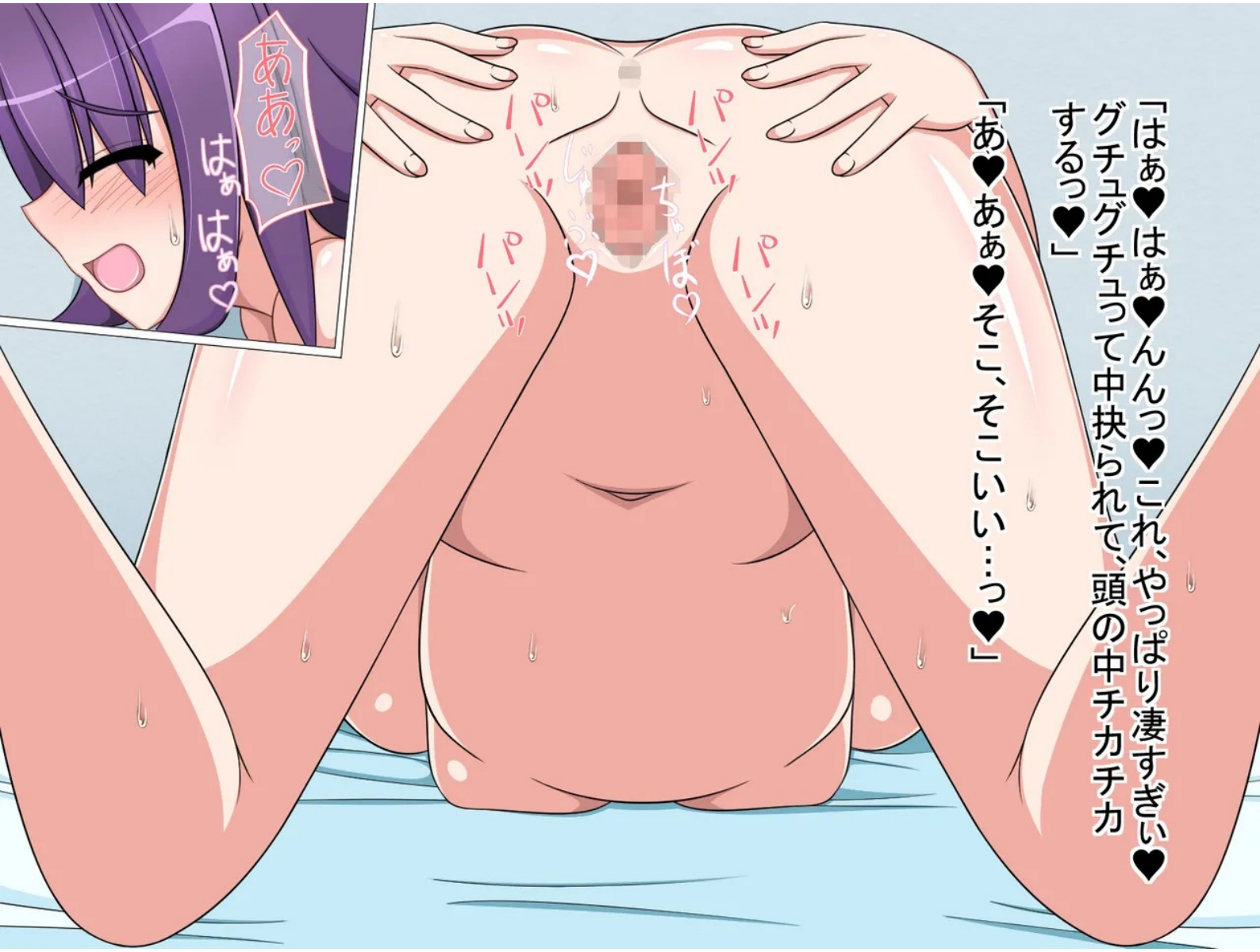
考は濡れそぼった秘所に自分の勃起したチンコを押し付け挿入する。



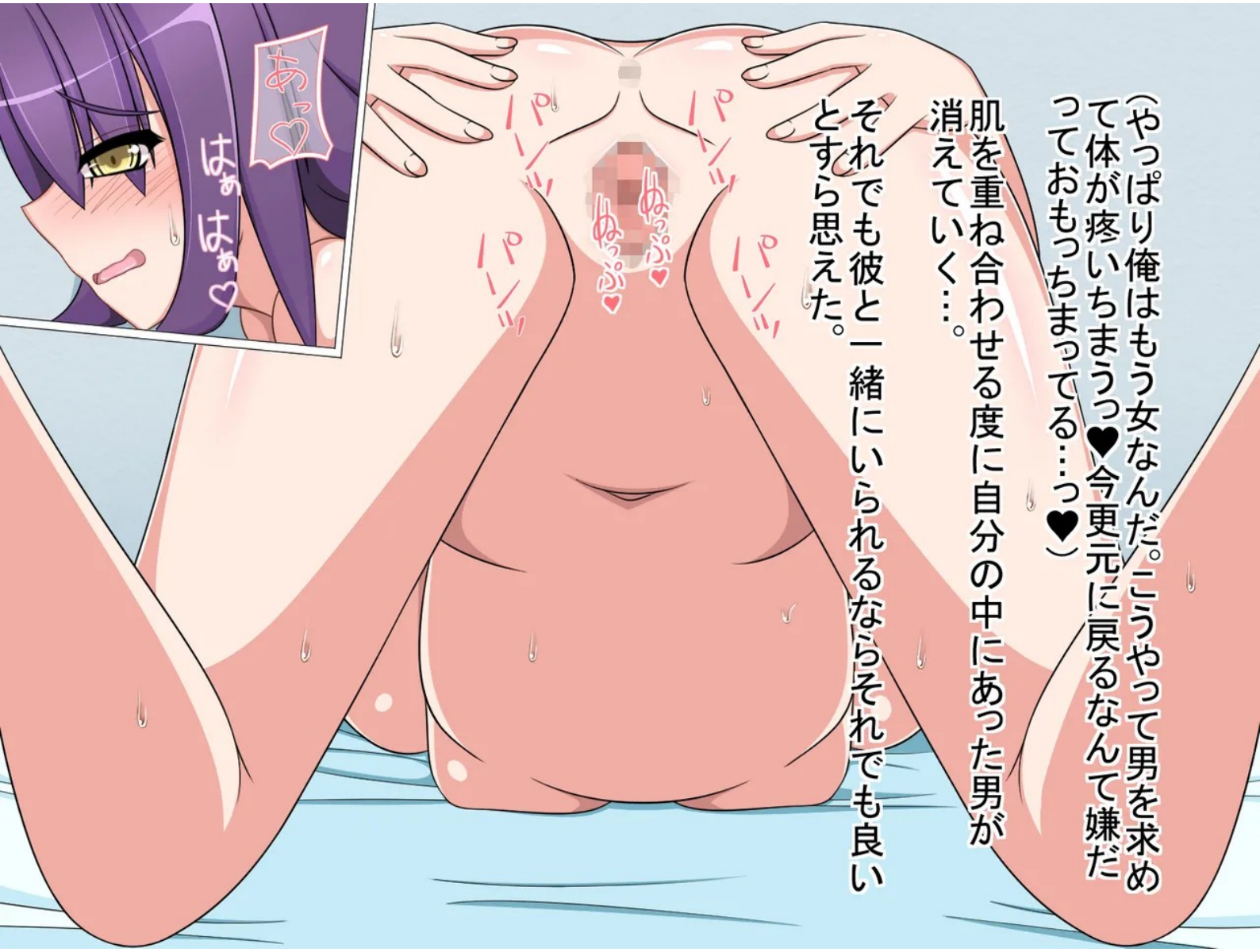
あの日以降、俺達は会うたびにお互いを求め合うようになっていった。

お互いに今まで押さえつけていたものが決壊したかのように目の前の肉欲に溺れた。


あひぃ♡
ずぷ♥
ずぷ♥
「あぁぁ…っ♥入ってきたぁ♥んんっ♥やっぱり
これ気持ちいい♥」
ズブズブと膣肉を掻き分けるかのように熱く
硬いチンコが中に入ってくる。


あぁっ♡
はぁはぁ♡
パンパンパンパン
ちゅぱ♡
「はぁ♥はぁ♥んんっ♥これ、やっぱり凄すぎぃ♥グチュグチュって中抉られて、頭の中チカチカするっ♥」
「あ♥あぁ♥そこ、そこいい…っ♥」


あぁっ♡
はぁはぁ♡
パーン
パーン
パーン
パーン
ぬっぷ♥
ぬっぷ♥
激しい腰使いでこちらの性感帯を責めてくる孝。
チンコの先で子宮口を何度も叩かれるたびに頭の中が真っ白になり意識が飛びそうになる。



（やっぱり俺はもう女なんだ。こうやって男を求めて体が疼いちまうっ♥今更元に戻るなんて嫌だっておもっちまってる…っ♥）

肌を重ね合わせる度に自分の中にあった男が消えていく…。

それでも彼と一緒にいられるならそれでも良いとすら思えた。


「…あっ♥」
膣内のモノが大きくなると同時に動きが一段と早くなる。
「くっ！優ちゃんもう、出すからね！」
「出して♥ドロドロの精液、中に全部出してっ♥」
「…っ！」
パンッ
パンッ
パンッ
ぬっぷ♥
ぬっぷ♥
あひぃ♥
はぁ
はぁ♡


びゅるるる～っ！
奥にチンコを押し付けられながら射精される。
子宮に流し込まれ拡がっていく精液の感触にイキながらもその心地よさに浸ってしまう。
びゅるっ♡
びゅ～♡
あぁっ♡
はぁはぁ♡


「あんなに出したのに何でまだこんなにデカくしてんだよ」
「優ちゃんが可愛すぎるのが悪い」
「……あほ」
ムキ
ムキ♥
はぁ
はぁ♡



見せ付けるようにこちらに押し付けられるペニス。
そそり立ったそれを見ただけで下腹部はまた熱く疼いてしまう。
改めて見るとやっぱり凄く大きくて硬そうだ。
これが今まで自分の中に入っていたんだと思うと愛おしくなりつい口で咥えてしまった。



「んっ……ちゅぶっ……♥れろ♥ちゅっ♥…ぢゅるる…ぢゅぶっ♥」

（うぁ♥舐める度に先っぽから我慢汁がトロトロ出てくる♥俺の口気持ちいいんだ♥）

「うぁ♥」

俺のフェラで気持ちよさそうな声を上げる考に気を良くし、さらに深く咥えこむ。


「ぢゅる、じゅぶ♥…んく♥じゅ、じゅるる♥」
「う！ちょ、ちょっとまって！そんな口の中で舐められたらすぐ出ちゃう！」
考が止めようとするのも構わず口の中で舌を這わせ刺激する。
はぁ はぁ♡
ちゅぽっ
じゅっぽじゅっぽ♡


「ぢゅる♥ぢゅぷぷぷ♥ちゅぶっ…んっ♥…ぢゅる
…ぢゅるる…ぢゅぶっ♥」
「…っ！そんなにされたら、もうっ！」
はぁはぁ♡
ちゅぽっ
じゅっぽじゅっぽ♡
（舌の上でビクビクしてる。本当に出そうなんだ）
（でもどうしよう。このままだったら口の中に出ちまうのに口が止まらない♥）


このまま出されることを想像したらドキドキと
胸が高鳴り始める。
俺は少しでも早く射精へと導くように口を窄め
じゅぽじゅぽと激しいストロークをする。
まるで自分からそれを望んでいるように。
はぁはぁ♡
じゅぽじゅぽ♡
ちゅぽっ♡


「んちゅ♥じゅる♥んく…んん♥ちゅっ♥ぢゅる♥」
「ごめん優ちゃん！もう出るっ！」
びゅるるる～っ！


「んむうっ！…んくっ♥んん♥じゅ、じゅるる♥」
（あぁ♥喉の奥にドクドク出されてるぅ♥）
喉の奥に叩き付けられた濃くドロドロとした精液。それは体を染め上げるように奥へと流れ込んでいく。


「んちゅ♥…こんなに濃いの出したのにまだこんなガチガチなんだな」
「まったく、どれだけしたいんだよ♥」
はぁはぁ♡
ちゅ♡
ちゅ


「あぁっ♥」
トロトロに濡れそぼった秘所にペニスをクチュクチュと擦り付けられる。
それだけで甘い女の艶声が漏れてしまった。



熱く硬いイチモツがズブズブと膣肉を掻き分け挿入される。

考のチンコを舐め続けていくうちに体が火照ってしまったのだろう。それだけで俺は軽くイってしまった。


「んんっ♥あっ♥あっ♥あぁっ♥」
じゅぷじゅぷといやらしい音を立てるほどの激しい動きに声が抑えられない。
あっ♡
あぁっ♡
「ま、まって♥そんなに激しくされたら変になる♥」
「そんなこと言ったって優ちゃんのオマンコが絡み付いてくるんだよ」


「っ♥」
口では止めようとしても俺の体は逃がさないとばかりに考のチンコに絡みつく。
敏感な胸やクリトリスを責められながら、力強く膣内を掻き分けられるたび快楽の波に飲まれそうになる。
はぁはぁ♡
パンパン
パンパン


（後ろからこんな動物みたいにされてるのに体が
喜んでるっ♥俺こいつにならもう何されても喜ん
じゃうんだぁ♥）
はぁはぁ♡


「ひぅ♥あぁぁ♥もう、だめぇ♥イクっ♥んんっ♥
あぁぁぁぁぁ……っ♥」
「優ちゃん僕もっ！」
あっ♡
ああっ♡
はぁはぁ♡


びゅるるる～っ！
膣奥に射精されると同時に体中を電気が流れ込んだみたいにビクビクと震え絶頂してしまう。
「はぁ、はぁ♥出しすぎだバカ♥」


月日が経つにつれ優ちゃんは少しずつ変わっていった。言葉使いもそうだが、仕草や表情もどんどんと女の子らしくなってきた。
事情を知らない人が見れば元男だなんて分からないだろう。
それだけ誰から見ても普通の女の子になっていった。


「…ん？どうしたの？こっちをじーっと見つめて
……ははーん。さては見惚れてたな？」
「まぁ、気持ちは分かるけどね。私だって立場が逆
ならそうしたくなるもん」
「あ、いや、それもあるけど。何か女の子らしく
なったなって思って」


「ん～お前もそっちの方が喜んでくれるかなって
思ったし…。それに女の子らしく振る舞えばいつ
でもこうやって甘えられるしね♪」


そう言うと優ちゃんは僕の胸に撓垂れ掛かる。
彼女の体から出る甘い香りが僕の脳を蕩けさせる。
『…ね、しよっか♥』


「ふふ♥ちょっと弄ってただけなのにチンコもうビクビクしてる♥興奮しすぎ♥」
足の指を器用に使いガチガチになったチンコを刺激する。
「こんなに大きくしてそんなに私の足気持ちいいの？」
ぐにゅ…
ぐにゅ…
ぐに…

（足の裏から血管がビクビクしてるのが伝わってくる♥んっ♥足で擦ってただけなのに私も濡れて来ちゃった♥）
ぴーん♥
ぴーん♥
ぐにゃ…
ぐに…



フニフニと足の指で刺激を加えながら擦り上げる。
こちらが攻めているはずなのに、私の頬は熱く口からは甘い吐息が出てしまう。


「つく！優ちゃん僕もうっ！」
「いいよ、そのまま出しちゃえ♥」
びゅるる～っ！
だーめ♥
だーめ♥


「あは♥お前の精液で足がベトベトだ♥」
「ふふ♥こんなに出したのにまだガチガチに硬いし絶倫すぎだろ♥」
にゅちにゅち


「んっ…ちゅっ…れろ…じゅぶっ…じゅるる」
「ひっ♥そんなとこ顔埋められたら恥ずかしいよ♥」
「んんっ、ちゅぶ♥…さっき散々足で弄られたからね。
今度は僕がしてあげないとね♪」
「あっ♥そ、そんな…っ♥」


「ちゅっ…ぢゅる…ぢゅるるっ♥それに優ちゃんのオマンコは僕のを欲しがってヒクヒクしてるよ♥」
「そ、それはっ♥んっ♥んんっ♥あっ♥あぁ♥」


「んっ…れろっ…ちゅっ…じゅるるっ♥」
（…っ♥舌でペロペロ舐められるの気持ちよくて…っ♥）
あっ♡
はーっ♥
はーっ♥


「あっ♥あぁ♥そんなにされたら私もうイっちゃう♥イっちゃうよぉ♥」
「ちゅぶっ♥いいよ優ちゃんこのままイっちゃって」
「ひぅ♥あぁあっ♥イクっ♥もうイっちゃうっ♥」
ぶんっ♥
あぁっ♡
はーっ♥
はーっ♥
ちゅ
ちゅぱっ♥


「愛液がすごいドロドロ溢れてくる。そんなに僕のチンコ欲しいの？」
「うん、頂戴い♥おちんちん中に頂戴♥」
ぶんっ♥
あっ♥
はーっ♥
はーっ♥
ちゅ
ちゅぱっ♥



「あっ♥あぁ♥すごい♥いいの♥動物みたいに後ろからチンコでコンコされるの好きぃ♥」

始めの頃の単調な動きと違いこちらを気持ちよくさせようと弱いところを探り、しっかりと感じさせてくれる腰使いで責められる。


「はぁ…♥はぁ…♥うぁ♥中で熱いのがズブズブ擦られて…っ♥気持ちいい♥」
（こ、これ良すぎて頭の中蕩けちゃいそう♥）
っ…
はーっ♥
はーっ♥
ずぶ♥
ズブ♥
ズブ♥


「っ！優ちゃんの膣内、熱くてチンコ溶けそう！」
「ひぅっ♥あっ♥だ、だめぇ…っ♥そんなに激しくされたら感じすぎちゃうっ♥」
言葉とは裏腹に体は自分から甘え求めるように膣肉は考のチンコに絡みつく。
あひぃ♡
はーっ♥
はーっ♥


「う！中の締め付けが強くなった。もうイキそうなんだね。いいよ好きなだけイって。僕も優ちゃんの中に出すよっ！」
「うん♥きてぇ♥私の中にいっぱい出してぇ♥」
あぁっ♡
はーっ♥
はーっ♥
パン
パン
パン
ずぷ


びゅるるる～っ！
（おおぉ♥お、おくでどんどん硬くなってきてる♥
あぁ♥出されちゃってる♥私を孕ませたいって
精子が中にいっぱい出てるのぉ♥）
んんっ♡
はーっ♥
はーっ♥
びゅるるる
イ♡


「っ！」
「あはっ♥こうやって腰、動かされるの考も気持ちいいでしょ♥」
「はぁ♥はぁ♥私も考のおちんちん気持ちいいよ♥」



考の上に跨り気持ちいいところを探るように自分から腰を動かしていく。

考のチンコは凄く硬く蕩けるようで腰を振るのに夢中になってしまう。



「あ♥中で、チンコが♥あぁ…っ♥ゴリゴリして気持ちいい♥」

腰を動かすたび膣内でビクビクとチンコが震える。いつもは、されてばかりだから自分から動き快楽を求めるのは新鮮で楽しい。



「優ちゃんそんなにそんなふうに動かされたらもう出ちゃうっ」

「ふふ♥いいよ♥いっぱい私の中に出して。考の精子、私の子宮の奥に頂戴♥」


あっ♡
あぁっ♡
ばーんっ♥
びゅるるる〜っ！
「あぁ♥ビチャビチャってオマンコの奥叩いてるっ♥
熱いのがお腹の中にじんわりと拡がってるぅ♥」
「っ！出るっ！」



「…ん♥こんなに出されたらお薬飲んでも赤ちゃん出来ちゃうかも♥」

「ふふ♥もしそうなっても、ちゃんと責任とってね？」


「ゆ、優ちゃんくつ付き過ぎじゃない？」
「え～？これくらい普通だよ。もう公認の仲なんだしさ」

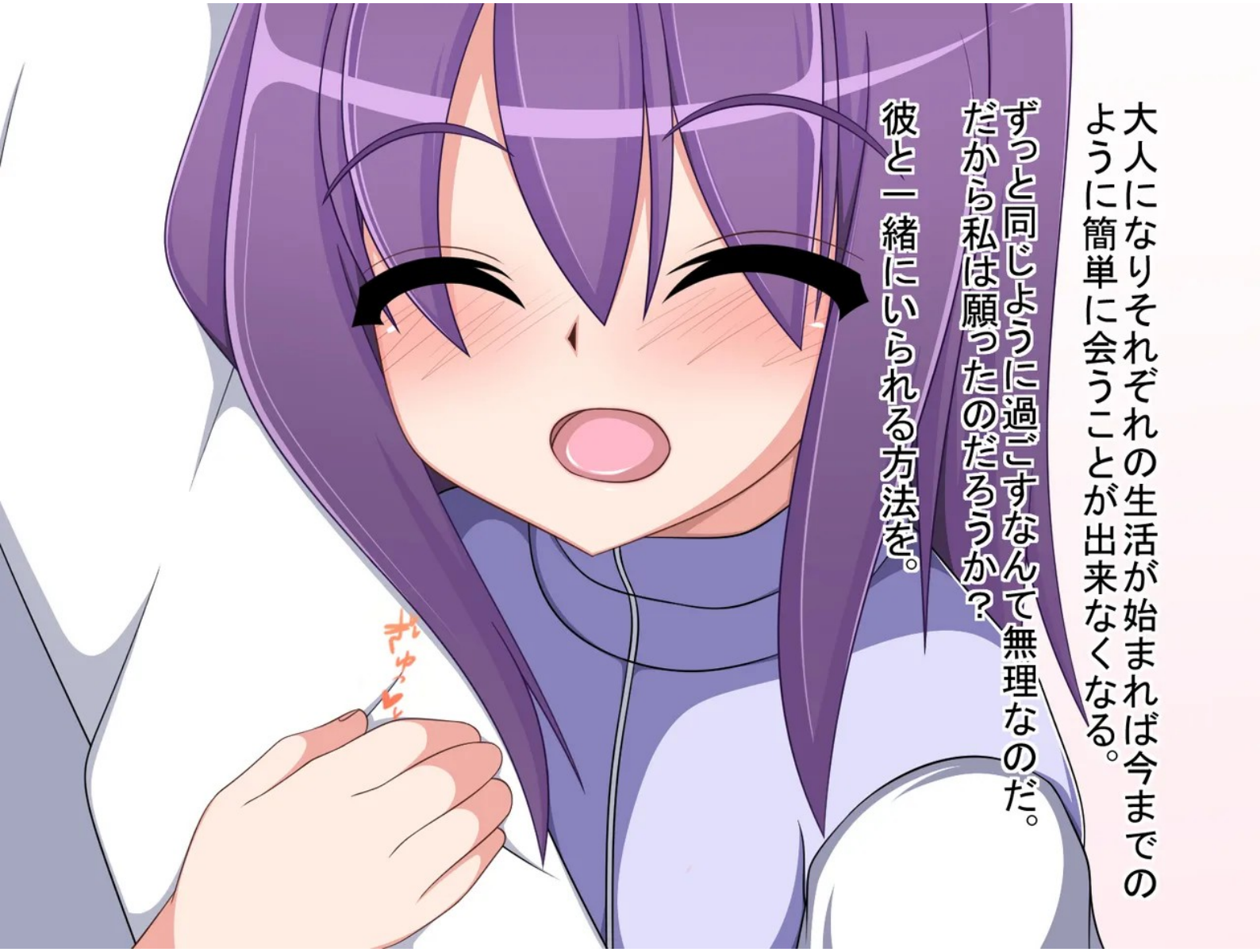

ここでは最初から女と認識されているからか、
たいした障害もなく私達は結ばれた。
自分が男だったという記憶はあるがこうやって女
として生きている今が幸せなので今更そんなもの
どうでもいい。

今思えば私の願いはただ単に考と離れたくないってことだったんだと思う。

子供の頃は大人になっても何だかんだで一緒にいるんだろうと思っていた。

だけど成長するにつれ、そんなのは無理なのだというのが分かってしまった。




大人になりそれぞれの生活が始まれば今までのように簡単に会うことが出来なくなる。
ずっと同じように過ごすなんて無理なのだ。
だから私は願ったのだろうか？
彼と一緒にいられる方法を。



誰がどうやってしたかなんて分からない。
けど感謝せずにはいられない。
どんな方法であれ私の願いは叶ったんだから。


「『今と変わらない関係でもいいからずっと一緒にいたい』か……」
「やっぱり心を男に変えても男と女じゃ結局こうなるか。せっかく記憶までイジってあげたのに」


「体が女のままじゃ男同士の変わらない友情は成立しなかったわけだ」
「…まったく。彼と離れたくないという君の願いを叶えるために色々してあげたというのに」
「…まぁ、いいか。どうやら君の本当の願いは叶ったようだしね」
END























































































































